

大和郡山の邪馬台国

矢田丘陵の丘に残された「邪馬台国伝承地」からは確かに大和盆地在眼下に広がり、ここに古代の女王が居たと想像してみるのも一つの古代史でしょう。そう確かに、遠い昔、「卑弥呼」が矢田丘陵の麓の丘に居たのです。



ニギハヤヒ

矢田の矢田坐久志玉比古神社の祭神は「櫛玉饒速日神（くしたまにぎはやひのかみ）」という名前の神様ですが、古事記や日本書紀には天孫で九州の高千穂峰に天降ったニニギノミコトの兄弟で、ニニギノミコトより早く大和国にやってきたといわれています。ところが平安時代に書かれた「旧事本紀」には、この神様のことが次のように書かれています。

『饒速日尊は、天神御祖の詔を稟けて、天の磐船に乗りて、河内國河上の哮峰に天降り坐し、則ち大倭の國鳥見の白庭山に遷り坐す。所謂天の磐船に乗りて、大虚空を翔り行き、是の郷を巡り睨て、天降り坐す。所謂『虚空見つ日本國』というは是なり』

ニギハヤヒは天つ神の命令で、天磐船に乗りいったん河内の国のタケルガノミネに降りて、そこから鳥見の白庭山にやってきた。天の磐船で、鳥見の地を見下ろして、ここは「美しきヤマトの国だ」と言ったということでしょう。

この鳥見の白庭山は、富雄川沿いにある奈良市の「登弥神社」のあたりとも、大和郡山市の「矢田坐櫛玉彦神社」のあたりともいわれますが、いずれにしる矢田丘陵の麓一帯と考えて間違いのないでしょう。さらに河内のタケルガミネというのは高安山のことで、この山から西に下った麓の「恩智神社」にもニギハヤヒの伝承が残されています。

この話は河内に居たニギハヤヒを首長とした部族集団が、生駒の東の富雄川流域に進出してことを物語っているのでしょう。古代史の学説ではニギハヤヒは北部九州からやってきたともいわれます。

彼らは大和郡山の矢田丘陵山麓を根拠地にしてここに古代王国を築いていったことは、ニギハヤヒの地元伝承が矢田の各地に残されていることが物語っています。おそらく彼らは新しい稲作技術と鉄の道具で、この地を豊かな田園に変えていったのでしょう。そしてある時期、ニギハヤヒの王国とその子孫は、奈良盆地のヤマトの国を支配していたのかもしれませんが。なぜなら、彼らは「天の磐船」に乗って、自在に空を飛べるほどの高い科学技術を持っていたのですから。

三炊屋姫（みかしきやひめ）

昔、富雄川流域の地方は「トミ」と呼ばれていました。登美、登弥、鳥見などと書かれることもあります。どれも同じように今の富雄から生駒あたりの土地と考えられます。

このトミに居た豪族の首長が長髓彦（ながすねひこ）で、彼には三炊屋姫という美しい妹がありました。倭国の古代の国の統治形態は、大きい国であれ小さい国であれ祭政二重主権が行なわれていました。政治を行なう王と神祀りを行なう王が二人で国を統治したのです。有名な「卑弥呼」は神祀りの女王で彼女には、国の政治を行なう弟が居たことが中国の書物に記されています。三炊屋姫も名前の通り、神の食事を調べて神祀りを行なう姫だったと考えていいでしょう。もちろん男であれ女であれ、神祀りを司るものは未婚だったはずで

ところが、日本書紀によれば、ある時西の国から「ニギハヤヒ」という若者がこのトミの地にやってきます。そして長髓彦を殺したニギハヤヒは三炊屋姫を妻とし、長髓彦に代わってこのトミの王になります。このことは、ニギハヤヒは征服者としてトミの国を襲い、トミを支配するために三炊屋姫を妻としたと考えられます。事実ニギハヤヒは、神武天皇と同じように天孫一族の神の子孫と書かれており、そして長髓彦を殺したと書かれています。

しかし、矢田や小泉の長閑で平和な風景を見ていると、別の物語があるような気がするのです。ニギハヤヒがやって来たころ、この矢田山から小泉にかけての土地はまだ森と川の未開の土地で、彼はここが農耕に適した土地だったと見抜き、新しい稲作技術と鉄の道具を持っていた彼は深い森を新田に変えていきました。その彼を見た三炊屋姫はニギハヤヒこそがトミの王に相応しいと考えて、自から臨んで結婚したとしたらどうでしょう。

結婚した二人は「ウマシマジ」という子を産み、ウマシマジは富雄川流域を根拠地として誕生する古代の王国の始祖となるのです。「ウマシマジ」と言う名前は「美しい呪いをする人」という意味です。史書では男性と伝えられますが、もしかしたら女性だったのではないのでしょうか。結婚して神祀りの力を失った三炊屋姫は、自分の子供に自らの使命を託したのです。その子は一族の神を祀り、民人たちに神の言葉を伝え、ニギハヤヒと長髓彦の物語を伝えていったのです。

矢田坐久志玉比古神社（やたにいますくしたまひこ）の謎

矢田町の「矢田坐久志玉比古神社」はまたの名を「矢落明神」といいますが、それはニギハヤヒが天の磐船で飛来した時、矢田の地に三本の矢を落として良き地を占ったという古伝承によるものです。神社の境内にはその磐船の破片と伝えられる岩石も残されています。この時、一の矢は神社の少し南の田圃の中、二の矢は神社の境内、三の矢は少し北の棚田の中に落ち、それぞれ耕作、神祀り、宮居の場所となったと伝えられます。「矢田」の地名もこのニギハヤヒ伝承から起こったもので、盛時には矢田41カ村の氏神であった矢田坐神社が、その祭神のニギハヤヒともに、古くから矢田の地に生きてきたことが伺えます。

ところでニギハヤヒの別の伝承がこの矢田に残されています。それは神社の近くの水田の中に「稲塚」と呼ばれる場所があって、大昔、ニギハヤヒに追い詰められた長髓彦（ながすねひこ）が、自分の身体に稲を積みせ身を隠そうとしましたが、見つかってしまい刺し殺されてしまったというものです。

長髓彦は日本書紀にヤマトに侵入しようとした神武天皇と戦った人物で、おそらく生駒から郡山の登美の地を支配していた首長だったのでしょう。記紀の伝えるところでは、ニギハヤヒは神武天皇と同じ天孫族で、長髓彦は賊軍です。だから天孫族に逆らった賊軍の首長としてニギハヤヒに殺されたことになっています。

長髓彦はおそらく天孫族が侵入する前にこの大和の国に居た人々の首長だったのでしょう。天孫族が三輪山に封じ込めた大物主の神は長髓彦のことだったのかもしれませんが。記紀の崇人天皇記に伝えられる三輪山伝説では侵入者が元の偉大な支配者を神として祀ることで、このヤマトの地を統治出来たと語られます。

ニギハヤヒが「虚空見^{そら}つ日本国^{やまとのくに}」と言ったように、登美の地を本拠地とした長髓彦にとってもこの矢田の地は重要なところだったはず。なぜなら丘陵地の続く登美の地から盆地の中央に出るには、矢田の地を通らねばならないからです。穏やかな丘陵の続くこの矢田の地が、遠い昔には長髓彦とその民人たちの暮らしていた場所だったと考えてみるのも、矢田の風景のひとつではないでしょうか。

大和郡山の邪馬台国

大阪教育大学の鳥越憲三郎博士が、「大いなる邪馬台国」でこの大和郡山に邪馬台国があったと論証したのは1975年のことです。それは高松塚古墳の壁画が発見され、古代史ブームが始まったころですが、邪馬台国論争はまだ「魏志倭人伝」に記された方位と距離論争から、大和説、九州説が唱えられていたころじゃないでしょうか。

佐賀の吉野ヶ里から弥生時代の大型建物や、卑弥呼の楼閣といわれる物見櫓の遺構が発見され、次いで奈良の纏向遺跡から卑弥呼の館と思われる大型建物の遺構が次々に見つかったのはその後のことで、現在では奈良盆地東南部の纏向が有力と考えていいでしょう。

ところで大和郡山の邪馬台国は、纏向とは盆地を挟んだ反対側の北西部にあります。しかも「物部王朝」といわれる古代豪族「物部氏」の祖先神たちの国が、中国の史書に残された邪馬台国の正体だということです。

物部王朝の祖神は、今までたびたび登場した「ニギハヤヒの神」です。鳥越説によると、ニギハヤヒの一族の国は最初北部九州にあったのですが、弥生時代の倭国の大乱で東遷を始めた彼らの部族は、瀬戸内海の各地に根拠地を築きながらやがて大和に入り、その西北部に一つの国を築きます。それが「虚空見^{そら}つ大和の国^{やまと}」で、邪馬台国です。やがて北部九州の「奴国(なこく)」を滅ぼした邪馬台国は畿内から九州に至る王権を築き、半島の「狗邪韓国(くやかんこく)」を通じて魏の国に朝貢したり、三角縁神獣鏡を貰ったりします。

ところで、魏の国に朝貢する邪馬台国には女王として「卑弥呼」が必要ですが、これは大和郡山説では物部氏の系譜の中に「日女命(ひめのみこと)」という女性が登場し、彼女が卑弥呼ではないかといわれます。日女命には「弟彦命」という弟の王が居て、彼が魏志倭人伝に記された男王というわけです。

中国の史書では邪馬台国は、その南の「狗奴国(くぬこく)」に滅ぼされることになりましたが、それが葛城山の山麓に国を作った「葛城や王朝」で、その葛城王朝も崇神天皇を始祖とする大和王権に滅ぼされる、それが鳥越博士の唱える古代史で、その中では大和郡山の地はある時期、王宮の存在した場所として語られているのです。

矢田丘陵の丘に残された「邪馬台国伝承地」からは確かに大和盆地が眼下に広がり、ここに古代の女王が居たと想像してみるのも一つの古代史でしょう。

そう確かに、遠い昔、「卑弥呼」が矢田丘陵の麓の丘に居たのです。